榎本植民と日本人メキシコ移民

メキシコ革命を生き抜いた日本人

古川　雄亮
矯正歯科

はじめに

２０１５年２月に決断科学大学院プログラムの活動を通じ、初めてメキシコを訪問することになった。メキシコは「混血の文化」で有名だが、そのルーツは１５７２年にスペイン人のエルナン・コルテスが率いる軍がアステカ帝国を侵略した歴史から端を発している。侵略によりスペインとメキシコの混血が進み、メスティーソと呼ばれる人種が初めて誕生した。一方では、多くの日系人がメキシコに居住しており、メキシコシティ滞在中にも街中で見かけることが多かった。本章ではメキシコに日系人が多く居住するようになったルーツを中心に述べていきたい。

榎本殖民

皆さんはメキシコに住んでいる日系人のルーツについてご存知であろうか。日本からメキシコへの移住が開始したのは、今から約１００年以上前に遡る。元々日本の海外への移民が開始したのが１８６８年のハワイへの移

住からで、その後アメリカやカナダ、メキシコ、ブラジル等の土地へ移民していくこととなる。海外移民を推進した主な理由としては、当時の日本国内における過剰人口政策と貧困への国策があった。メキシコに移住が開始されることになったのは、当時松方内閣の外務大臣に任命された榎本武揚の活動が大きなきっかけとなった。日墨修好通商条約が１８８８年に調印され二国間の外交関係が始まった後、殖民推進論者であった榎本武揚は外務大臣の職を辞した１８９３年に「殖民協会」を設立した。そして、メキシコに夢とロマンを求めた若者３６名（全員男性）を全国から集めていった。彼らが俗にいう「榎本殖民」である（殖民の多くは東北出身者であったようだ）。メキシコ政府との土地契約交渉を進めて１８９７年３月に横浜港を出航し、約４８日後にメキシコ到着に至った。この時、ラテンアメリカでの日本人移住の第一歩がメキシコの地（メキシコ南部に位置するチアパス州エスクィントラ）に刻まれることとなる。彼らは長い航海を経て１８９７年５月１９日に無事に殖民地へ辿り着く。彼らはコーヒー栽培を始めることとなるが、幾度と苦難に見舞われることとなる。それは雨季やコーヒー苗の種類等に対する知識が不足していたことと、コーヒー豆を購入するための資金が不足したことである。殖民地の開墾を始めた5月はすでに雨季に入っており、草を何度刈ってもすぐに生えてくるといった困難に遭遇していた。当時の栽培方法としては、１２月から3月までの乾季の間に原野を切り開き、草や土を乾燥させて4月頃の雨季に入る前に種を蒔くという方法が一般的であった。すなわち、5月に開墾を始めたということは遅すぎるのである。また、彼らはアラビア種というコーヒー苗を栽培していたが、この苗は高地でなければ育たない品種であり、低地にあった殖民地では栽培に全く適していなかった。そして、他の新しいコーヒー苗を探そうとするのだが、すでに資金が尽きてしまいコーヒー栽培を持続することが出来なくなってしまった。元々榎本殖民には予定資金の半分程度の資金しか集まっていない状態で移住を開始したため、移住する前からすでに資金不足だったわけである。事前の調査不足、入植時期の誤算、そして資金不足が重なり1年も経たずに榎本殖民は崩壊の一

途を辿った。崩壊後、殖民団員の多くはメキシコ各地へと消えてゆき、さらに榎本武揚も殖民事業から手を引いてしまった。そして榎本殖民はメキシコの空の下に消え去ることとなる。

日墨協働会社の設立

榎本殖民の崩壊後、各地へ消えていった後、殖民地はどうなったかというと、実は殖民者の内6名が何処へも立ち去ろうとしなかった。未来の日本人移民のために留まったのだ。彼らは、出身地の奥州（東北）と三河（愛知）の字をとって「三奥組合」たる組合を作りメキシコでの再建を目指すため共同事業を始めた。その内容は酒や竹細工といった商品を販売し、さらには雑貨店を開いて日用品を売る等であった。事業を次第に拡大していき、わずか5年程で当初の資本金が4倍まで増えていった。結果的に6人で始めた共同事業は大成功し、１９０５年には「日墨協働会社」を設立するに至った。また彼らは小学校を建設しては村に寄贈する等の活動を事業として行っており、メキシコ社会に大きく貢献した。さらに、現在当たり前のように書店で手に入る西和辞典のルーツは、日墨協働会社の活動に端を発している。彼らの努力の成果は現在もなお生き続けている。

メキシコ革命の勃発

１９０５年から順調に発展していった共同事業の日墨協働会社であったが、１９１０年に「メキシコ革命」の勃発により、彼らの活動の維持が非常に難しくなる。メキシコ革命が当時日本人にどのような影響をもたらしたかについては後程説明することとし、まずは多くの読者が知らないと思われるメキシコ革命について簡単に説明しておく。

メキシコ革命は１９１２年に勃発した政治の民主化、及び経済・社会の改革を目指した改革運動のことをいう。当時、大統領であったポルフィリオ・ディアスの独裁体制に反対し武装蜂起が多発したことがきっかけとなった。また、その頃はメキシコにアメリカやフランスといっ

国立宮殿のビリャ（左）とサパタ

出典　Archivo Casasola 所蔵

た外国資本の参入がブームであったことから、外国資本による経済支配の脱却や過酷な労働条件の改善等も武装蜂起が勃発した理由である。ディアス体制はいわゆる、「パンと棍棒」による強権政治であると風刺され、たびたび非難されていた。反対派を思い通りにするために利権、すなわち「パン」を与え、一方受け取らない者には「棍棒」をふるって排除する様な政策を行っていた。この政策により、メキシコ社会は抑圧的で閉塞的になり多くの民衆の不満を募らせる結果となった。１９１１年、ディアスは国外追放され、１９１５年にパリで没した。そして、１９１７年の革命憲法の制定により、メキシコ革命は終結することとなる（メキシコ革命の期間については、研究者によって見方が異なり、色々な説がある）。

メキシコ革命における２人の伝説的英雄

街中を歩くと、たくさんの張り紙がメキシコシティ中に貼られているのが非常に印象的だった。それらを見ていて、１つ気になったことがあった。２人の男性の写真

が掲載された張り紙がしばしば見かけられたということだ。現地に滞在していた際は一体誰なのか分からなかったのだが、調べてみるとメキシコ革命で活躍した英雄であった。英雄の名はビリャとサパタで、私が街中でよく見かけた写真は彼らのものだと思われる。

ビリャとサパタは当時搾取と貧困に苦しんでいた農民や民衆の立場に立ってメキシコ社会を変えようと戦ったことで歴史的英雄とされている。メキシコ革命に大きく貢献した2人は最終的に暗殺されて生涯を終えることになったが、現在でもメキシコ国民は彼らを英雄として扱っている（調べてみると、メキシコに興味のある外国人であれば誰でも知っている程有名な人物であるのだという）。現在のメキシコでも、国家権力の抵抗シンボルとしてビリャとサパタの写真が横断幕やビラにシンボルとして使われることが多いとのことだ。私がメキシコシティ内を歩いていた時に彼らの写真をしばしば見かけたのは至極当然のことであったのだろう。

メキシコ革命勃発時の日本人移民への影響

それではメキシコ革命が勃発した当時、日墨協働会社には何が起きたのかを説明していこう。まず暴徒により日墨協働会社の商店や倉庫が襲われ、物資の略奪が起こった。革命による経済の破綻でインフレによる貨幣価値の大暴落が起こり、紙幣は紙屑同然となって、さらには鉄道の破壊によって物資の輸送が不可能となり売る品物も無い状態であった。その結果、彼らは経済活動を維持することが全く出来なくなってしまった。メキシコ革命による物的損害に加えて、給料を支払うことが出来なくなってしまい社員の不満も募っていった。最終的に日墨協働会社の財産は社員に分配されて、解散を決議するに至った。１９２０年のことである。日墨協働会社はメキシコ革命をきっかけに１５年という年月で歴史の幕を閉じたのである。

日本人民族の潔さ

メキシコ革命勃発時、多くの外国資本が革命中に破壊されたことからメキシコ新政府はアメリカやフランス等から多額の賠償請求を受けることとなった。当時、新政府の大統領に着任したオブレゴンが革命中に損害を受けた外国人に対して賠償を申し出たからである。外国からの信用を得るための苦渋の決断だったに違いない。当然、メキシコ移民であった日本人も被害を被ったわけだから損害賠償請求を行う権利はあった。しかし、日本人は損害請求をしなかった。彼らは書簡を大統領に送り損害賠償請求をしないと申し出たのである。その内容は、「国の進展のための革命はやむを得ないことであり、外国人であってもその痛みをメキシコ人と分かち合うべきである。したがって、損害賠償請求権を放棄する」といったものであった。アメリカやフランス等、他の諸外国は賠償請求したのにも関わらず、日本だけはその権利を放棄した。ここに日本人という民族の高潔さが感じられる。大統領も彼らの言葉に感激したに違いない。私がメキシコ滞在中に多くのメキシコ人と出会ったが、とても友好的に接してくれた。今回の旅でメキシコという国は非常に親日であるという印象を受けた。あくまで私の予想の範囲ではあるが、メキシコ革命での日本人にまつわるこの話がメキシコで長く語り継がれていることが影響しているのかもしれない。今後再びメキシコを訪れる日が来ることを心より待ち望んでいる。

参考文献

上野久「サムライたちのメキシコ」、京都国際漫画ミュージアム

国本伊代「メキシコ革命」、山川出版社

大垣高志郎「物語 メキシコの歴史」、中公新書

国本伊代「ビリャとサパタメキシコ革命の指導者たち」、山川出版社

古川雄亮　ふるかわ　ゆうすけ

九州大学大学院歯学府口腔保健推進学講座歯科矯正学専攻博士課程
決断科学プログラム　健康モジュール

１９８５年福岡県生まれ。東北大学歯学部を卒業した後、九州大学病院で研修医修了を得て現在に至る。ストア作動性カルシウム流入関連遺伝子の異常による外胚葉異形成症発症に伴うエナメル質形成不全症の発症メカニズムを遺伝子改変マウスを用いて研究中である。